Euro-NARASIA | STUDY REPORT

折口信夫の明日香〔2〕

植村和秀
UEMURA Kazuhide

【要旨】

折口信夫の奈良に対する思いは、「飛鳥の村」と題した昭和19（1944）年の詩に現れている。これは、人びとのまじめな社会生活が大切にされることを祈るような詩であり、戦争の末期に公表されたものである。特に関東大震災以降、折口は日本社会がすさんでいると感じ、すさみを打ち破ってくれる役割を、文芸復興に託そうとしたのである。

そして奈良には、文学的想像力をかきたてるのに十分な歴史と、想像力を働かせるのに十分な自由があった。「大和の国」は、敬愛する祖父の故郷であるのみならず、日本文学を育み、今なお育みうる土地として愛されたのである。

昭和22（1947）年刊行の『大和文学』第1集に、折口は、「飛鳥をおもふ」と題した一文を寄せている。そこで折口は、飛鳥への思い、昔の人の心情への思いを語る。その心情は、同じ山を見て同じ道を歩けば、あるいは、同じ風を感じ同じ海を見れば、今度こそ文学として語り伝えられるようになるのかもしれない。

折口は、過去が心によみがえってくる瞬間を掴み、それを文学として表現しようとする。そのためには、日本社会が根本的に持続していることが必要であり、奈良を歩く折口は、そのような持続性への自信と希望を求めていた。日本社会がすさんでいき、持続性が失われつつあるとの危機感を強めた折口にとって、奈良は、日本の未来を求める場所にもなっていったのである。

キーワード

折口信夫
飛鳥
大和
文芸復興

はじめに

折口信夫には、奈良県への特別な思いがある。母方の祖父が明日香村の出身であり、折口はその立派な生涯を心から尊敬していた。さらにまた、日本の古代を研究する者として、当時の中心地であった明日香(飛鳥)、大和に対する特別の思い入れもあった。晩年の昭和28(1953)年に口述した「自歌自註」において、折口は、奈良県を「第二の故郷」と呼んでいる。折口には、「どうも大和の国が私の心にかゝる」のである。(※註1)

折口のこの思いは、昭和の戦争の終わり近く、日本の未来を憂慮するときに、静かな雰囲気の漂う詩として言葉に表された。昭和19(1944)年1月に公表され、戦後の詩集『古代感愛集』に一部修正して収録された「飛鳥の村」の詩である。(※註2)

はるかなる野末の石の
　光りつゝ見ゆる朝かも—。

旧里(フルサト)の飛鳥の村に
しづかなる年は　来たりて、
　咳(シハブカ)ふ老いびともなし。
喜びの黙(モダ)を深めて
をとめ等は、春を装はむ。

しづかなる年の朝(アシタ)の
　のどかなる四方の霞に、
はるかなる野末の石の
心美(ウツクハ)し　自己(オノレ)輝き、
　眩(マギラ)はし　心を快(ヨ)くす。

わが国は　四方(ヨモ)に戦ふ。
たゝかへど　おごることなく
緊りにし　万葉(マンネフ)びとの心をぞ
人は守(モ)るらし—。

しづかなる朝はたけつ、
　野の石は　いよゝ照り行く

野の石について

折口の心の焦点は、「はるかなる野末の石」にある。この石について、明日香村を歩いた人間であれば、村内各地にある石造物を思い出し、どうしても聞きたくなるであろう。どの石のことなのか、と。

折口の門下生である水木直箭(1897〜1976)は、実際に折口に聞いたそうである。水木は生駒郡郡山町(現在は大和

昭和15年頃・箱根仙石原にて
提供：國學院大學折口博士記念古代研究所

郡山）に生れ、國學院大學で折口に学んだ。機会を得て恩師に質問すると、そんな石はないとの不機嫌な返答であった。「先生は現実と夢幻との間で、飛鳥を想うておられる」のであり、「実際に見える風景などは、問題ではない」のだった。こう、水木は書き記している。（※註3）

それでは野の石は、なぜ輝くのか。新年の朝日を浴びて輝く石は、心美しく輝いている。つまりこの石は、戦時下にも「おごることなく」、まじめに社会生活を営んでいる人びとの心なのであろう。心が美しく輝いているから、石は輝くという見立てである。

わが国は　四方（ヨモ）に戦ふ。
た、かへど　おごることなく
緊りにし　万葉（マンヨウ）びとの心をぞ
人は守るらし―。

人びとが静かに黙々と、まじめに社会生活を営んでいる。その姿は飛鳥の村の風景として表現され、「万葉びと」という古代の人びとにつなげられる。しかし、日本人を礼賛するにしては、どこか緊張感のありすぎる詩である。これはむしろ、そうあるための警鐘、あるいは、新年を迎えて日本に与えられた自戒の言葉なのではないか。日本社会の未来は、こうでなければ開かれないという姿を、折口は、文学によって表現しようとしたのではないだろうか。

折口は、日本社会の未来に対して、決して楽観的な見通しを持っていなかった。むしろ日本社会のすさみを、とりわけ関東大震災以降、きわめて強く感じ取っていた。近代化に伴う日本社会の変化は、社会から秩序やうるおいを失わせる方向に働き、社会のあちこちで、ゆがみや弊害が出てきていると感じていたのである。

日本社会のすさみ

折口は、関東大震災以降、日本社会のすさみ方がひどくなっていると感じていた。社会生活の秩序が崩れ、うるおいが失われたと痛感したのである。

國びとの
心（ウラ）さぶる世に値（ア）ひしより、
顔よき子らも、
頼まずなりぬ　（※註4）

折口は「礼譲（れいじょう）」という言葉で、社会の秩序とうるおいを表現し、礼譲ある社会を保守しようと努力していた。すなわち、社会の保守主義者である。折り目正しく、きちんとして心のこもった、礼節あり人情味あふれる人間関係を愛する折口は、それをどうしても守りたかった。飛鳥の村の心象風景は、そのような正しい社会の姿なのである。

折口によれば、日本社会の礼讃は、古典への愛着が守ってきた。『古事記』『日本書記』『万葉集』のような古典を読んだり、「生活の古典」としての年中行事を行なうことによって、「何となく背景のある、うるほひのある生活を求める」心が満たされてきたのである。（※註5）

「我々が古典に接して感じる喜びは、その優雅な精神が、我々の内生活に譬へやうのない安らひを感ぜしめる所にある。年中行事の場合に於いても、実生活にとって何の利害もないことながら、この長い時代を経て来た生活様式を、ある時期に復習するといふことが、日常の油ぎった、血のにじんだ我々の生活の間に、憩ひある日を持ち来すといふ所に、生活の古典としての意義があるわけだ。譬へば、門松を立てるといふことに何の意義があるか。功利的な考へから言ふならば、山の松の立木が門松一本々々に切られて減って行くわけだ。だから近年では、芯の松を使はず、枝松を使ふやうにといった布告を出した府県すらもある位だ。しかし、門松を立て、しめを張りまはした正月の家に、住むこと、出入ることが、どんなに我々の心を憩はせることか」。（※註6）

ところが近代化は、このような心を吹き飛ばして進行する。ゆっくり万葉集を読むひまはなくなり、正月の行事をする余裕もなくなる。時とともにますます忙しくなり、昔のものは忘れられていく。これらは、やむをえない変化なのかもしれないが、それでも人間は、何らかの心の豊かさを必要とするはずである。

折口が愛してやまない文学は、このような時にこそ、社会の未来を開く力を発揮すべきものであった。しかしどうも、そうはなっていないと折口は判断する。折口は文芸復興を願い、それこそが昭和維新の要であると考える。折口にとって、歌人や詩人、小説家に神道家、神道の神学を担う国学者こそは、政治家よりも軍人よりも、日本社会の未来に重要な人びとなのである。

懐かしい大和

「青山に日照る国。国のほに穂波寄る国。その穂、振り分けて葺きあげた屋の棟には、直に天がひろがって居る。静かな日は、縹（ハナダ）の空が、その上に掩ひかぶさって寝る。荒れの夜は、風に乗る茅のそそけが、斑馬（フチコマ）になって飛ばうとする。空渡る鵠（クグヒ）の声は、山の端の真神の叫びと相交替して、耳に沁む。古い大和の国を憶ふと、かうした姿が、記憶の境を超えて浮んで来る」。（※註7）

大和盆地の光景は、折口には格別であった。大和の空はおおらかに広がり、自然が人間の営為を包み込む。変化する大都会であり続けた京都市に比べて、奈良県には、どこか郷愁を感じさせる風景が見出される。田園のはるか向こうに山が見え、さっぱりとした風景は、古代的なものを想起する妨げにならない。人間の営為が強すぎないため、自由な想像力の働きを妨げないのである。

飛鳥宮跡（伝飛鳥板蓋宮跡）
撮影：筆者

大和の国には、文学的想像力をかきたてるのに十分な歴史と、想像力を働かせるのに十分な自由があった。奈良は、敬愛する祖父の故郷であるのみならず、日本文学を育み、今なお育みうる土地として、折口に愛されたのである。前頁に引用したのは昭和10（１９３５）年に公表された「やまとの一もと薄」の一文であるが、同様の思いは、昭和17（１９４２）年公表の「古事記の空　古事記の山」にも繰り返されている。

「晴れた夜は、縹色の空にゆくりなく現れた白雲が、天の斑馬のやうに駛けて来る。又照る日には、国原をめぐる山々が、四方に青垣を立てゝ霞んでゐる。現実の世にも、大和の国は、かうした古典の匂ひに、旅人の心をほのぼのとさせるものがある」。（※註8）

折口にとっての奈良は、心にゆとりをもたらす土地であった。建物が立て込み、人間の力が強く感じられる京都よりも、奈良には、ゆったりとして、さっぱりとした雰囲気がある。歴史が深いのに、歴史の重みを感じさせることが少ない。山やまの姿は変わらず、田園の雰囲気は残っていても、人間の作ったものが、それほど残っていないからである。

「私は、若い時このあたりを歩きながら、一木一石、麦畑に咲くげんげの花の末々にいたるまで、何か飛鳥の生活のなごりをもってゐるやうな気がしてならなんだものである。しかし、現実に住む飛鳥びとは、千年前も五百年前も、今も尚、飛鳥の京を思ひ出すこともなく、田に刈り敷きし、畑に堆み肥して暮して来てゐるのである」。（※註9）

これは折口が、飛鳥坐神社から岡寺辺りを解説するなかで述べた思い出話である。深いのに重くない奈良の歴史は、文学に必要な素材と、何よりも貴重な自由を与えてくれるものであった。

大化の改新の舞台とされる飛鳥板蓋宮の故地に立ってみれば、今でも、山や丘を見晴らし、田畑を見渡すことができる。復元された石敷の上に立って、何もない空間のなかで、はるかな昔に自由に思いをはせることができるのである。

いにしへびと　あるは来逢はむ。
神南備の萩ちる風に、山下ゆけば
（※註10）

折口が愛する大和の国は、文学にとって未来を秘めた土地柄だったのではないだろうか。

大和と文学

昭和22（１９４７）年に刊行された『大和文学』第1集に、折口は、「飛鳥をおもふ」と題した一文を寄せている。これは大和文学会の機関誌であり、奈良県丹波市町（現在は

飛鳥坐神社
提供：編集者

天理市）の養徳社から発行されている。

その編集後記には、「狭い地方に閉ぢこもらずに、その風土的特色を生かしつつ廣く全国に普遍性を持った文化」を生み出さんとする決意が述べられ、「全国の文化人」に寄稿が呼びかけられている。（※註11）ちなみに、『大和文学』の編集委員は、田中克己、保田與重郎、前川佐美雄、瀧井芳次、吉岡武雄である。

ここで折口は、文学の発生に思いをはせつつ、飛鳥への思いを語る。「私はまた、飛鳥に来てゐる。来はじめて、此で幾度、訪れたことになるか。もうそんなことを考へるさへ、妙な気になる程、遠い昔からこゝへ来たのである」。（※註12）そう述べて、「神南備山の東麓、飛鳥川沿ひの道」、今風に言えば甘樫丘の東、飛鳥寺の西辺りの川沿いの道を歩いた記憶へと語を継いでいく。（※註13）

「過去千年、二千年、大体この路線に沿うたものと想像することの出来る昔の道を、こんな風にして歩き、かう言ふ風に考へながら通った人々の思ひが、一つだって、この世に痕をとゞめてゐるだらうか。

私もやはり、うなだれて思ひ深さうな外見を持ってゐるかも知れぬが、昔の人は、真に悲しみに沈んで、或は又喜びほこって、どうかすると、憤り戦いて、通ったに違ひない。其心が、ほんの断片だけも、日本人の誰の心にも思ひ浮べることが出来なくなってしまってゐるではないか。だが、私が今かうして歩いてゐるやうに、思ひつゝ辿ってゐた昔びとのもの思ひが、ふっと私の想念のひまひまに、絡むように隠見する。

さういふ思ひが、ため息と差別のない囁きとなって口を洩れ、又ゆくりなく聞いてゐる人でもあると、口から口へと伝へられて、初めて世間の耳目に触れて、周知の歌となった。どうかすると、さう言ふ歌の記録せられたものが、後世に命永く残ることになったのである。併し多くの中の、さうした幸運な数首の外に、記憶や想像の圏外に消えてしまった永い思ひが、どれほどあったであらう」。（※註14）

消えてしまった心情は、しかし、思いもよらない形でふっと心に浮かんでくるかもしれない。昔の人の思いは、同じ山を見て同じ道を歩けば、あるいは、同じ風を感じ同じ海を見れば、今度こそ文学にして語り伝えられるようになるかもしれない。

過去と現在

「十年前、熊野に旅して、光り充つ真昼の海に突き出た大王个崎の尽端に立った時、遥かな波路の果に、わが魂のふるさとのある様な気がしてならなかった。此をはかない詩人気どりの感傷と卑下する気には、今以てなれない。此は是、曾ては祖々の胸を煽り立てた懐郷心（のすたるぢい）の、間歇遺伝（あたゐずむ）として、現れたものではなからうか」。（※註15）

たびごゝろもろくなり来ぬ。志摩のはて
安乗の崎に、燈の明り見ゆ

天づたふ日の昏れゆけば、わたの原
蒼茫として　深き風ふく　（※註16）

青うみにまかゞやく日や。とほぐ〳〵し
妣（ハヽ）が国べゆ　舟かへるらし　（※註17）

折口は、過去が心によみがえってくる瞬間を掴み、それを文学として表現しようとする。日本社会が根本的に持続しているのであれば、過去の人びとの心情は、どこかで、現在の人びとの心情につながっているはずだ、というのがその根拠であろう。そのためにも、奈良を歩くことは貴い。

明日香風　きのふや千年。　やぶ原も
青菅山（アヤスガヤマ）もひるがへし吹く　（※註18）

文芸復興のためには、日本社会が根本的に持続していることが必要であり、奈良を歩く折口は、そのような持続性への自信と期待を奈良に求めていた。日本社会がすさんでいき、持続性が失われつつある危機感を強めていた折口にとって、奈良は、日本の未来を求める場所にもなったのである。

おわりに

折口は昭和21（1946）年10月に、「饗宴の記憶」と題する詩を公表した。『近代悲傷集』に収録されたその一節には、若人の美しい装いを讃えた末のはかない思いが語られている。

斯（カ）くほしきまゝに　ふるまひ
傲（オゴ）りつゝありしあひだに
戦ひは既にひろごり
やぶれたり。人の世の夢—

たゞ夢と　あとなくなりて—、
をとめ子は　兵器造（ツハモノツク）り—
をのこらは　いくさの場（ニハ）に—
若き者　皆家出でぬ。　（※註19）

3年も経っていない「飛鳥の村」の風景も、あれも夢だったのだろうか。折口が大切にした日本社会は、現在も存続しているのだろうか。

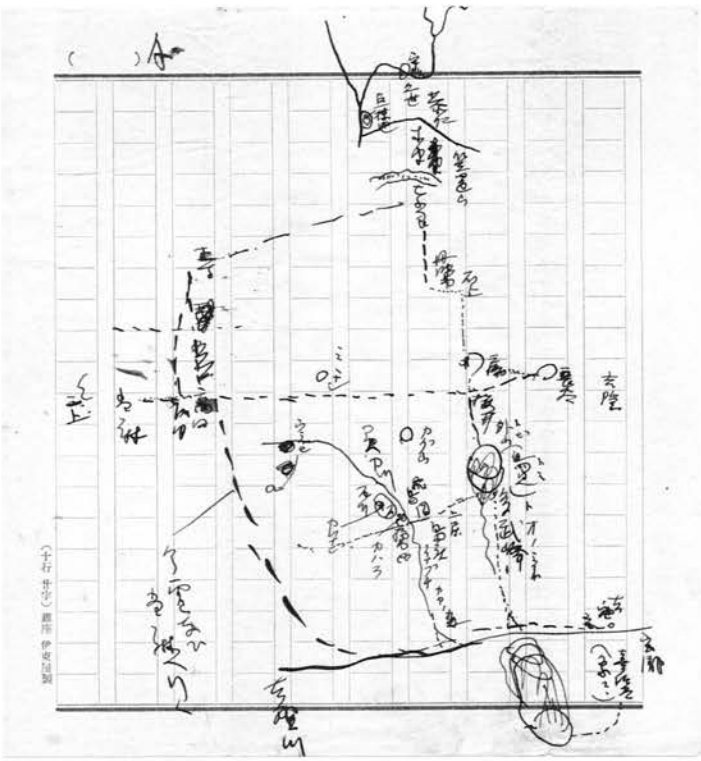
それからさらに70年以上が経った。折口が希望した文芸復興は起こらず、折口が研究した民俗の多くが失われている。明日香村の風景は失われていないが、日本全体に関して言えばどうなのか。そのような思いを持つほどに、奈良の風景の懐かしさは、ますます大切なものに思われてならないのである。

（了）

〈註記〉

1 折口信夫『折口信夫全集』第31巻、中央公論社、1997年、21頁。
2 『折口信夫全集』第26巻、中央公論社、1997年、78～79頁。
3 水木直箭『随筆折口信夫』、角川書店、1973年、92～93頁。
4 『折口信夫全集』第24巻、中央公論社、1997年、206頁。
5 『折口信夫全集』第19巻、中央公論社、1996年、179頁。
6 『折口信夫全集』第17巻、中央公論社、1996年、178頁。
7 『折口信夫全集』第5巻、中央公論社、1995年、301頁。
8 『折口信夫全集』第33巻、中央公論社、1998年、173頁。
9 『同』、184～185頁。
10 『折口信夫全集』第24巻、112頁。
11 『大和文学』第1集、養徳社、1947年、129頁。
12 『折口信夫全集』第33巻、192頁。
13 『同』、192頁。
14 『同』、193頁。
15 『折口信夫全集』第2巻、中央公論社、1995年、15頁。
16 『折口信夫全集』第24巻、102頁。
17 『同』、103頁。
18 『同』、110頁。
19 『折口信夫全集』第26巻、259～260頁。

うえむら・かずひで
1966(昭和41)年京都府生まれ。京都大学法学部卒業。京都産業大学法学部教授・奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員。専門は政治思想史。『昭和の思想』(講談社選書メチエ)、『日本のソフトパワー』(創元社)、『ナショナリズム入門』(講談社現代新書)、『折口信夫』(中公新書) など著書多数。



折口信夫自筆の明日香の地図（昭和10年8月頃・西角井正慶教授宛ての手紙に同封されていた）
提供：國學院大學折口博士記念古代研究所